

2014（平成26）年度 中部支部第6回大会報告

2014年9月21日（日）、浜松学院大学において中部支部第6回大会が開催されました。以下、発表要旨を掲載いたします。（※敬称略）

○大会テーマ：比較文化と学術的伝統

【第1部】自由研究発表（一人発表20分＋質疑応答10分）

司会：安藤 雅之（常葉大学）・白鳥 絢也（星槎大学）

学際的かつ比較文化的な建築様式研究の難しさ

ーフンデルトヴァッサー・安藤忠雄の建築から読み解く

野口 司（東京大学宇宙線研究所重力波推進室 学術支援専門職員）

芸術的な建築を学際的でかつ分野横断的に加え、比較文化の視座によって解明するのは困難を極める。とりわけ、画家として名声を得たフンデルトヴァッサーの建築作品は、あまりに特殊な解によって創られ／造られたため、建築学の分野で真正面から論考されているものは皆無に近い。他方、安藤忠雄は日本の建築家としては異色の存在である。建築学を正式な高等教育を受けずに大家となった点が挙げられ、また、作品の評価が二分する状況にあるからである。両者の共通項は、「自然と調和する建築」を謳い、建築家は社会的であるべきだとする点にある。しかし、表象は正反対であり筆者はこの点に着目し多面的な考察を試みた。

論考の前提条件として、日本では分野連携・融合領域研究を促進しているものの十分でない点や、建築を包含する芸術学が独立した分野であること、更に、芸術学内部でも理論と実践が乖離しているか、連携が不十分であるだろうということが挙げられる。

フンデルトヴァッサーの特殊性は、ナチスによるオーストリア併合という抑圧が源流にあり、ユダヤ人の母らを守るため仕方なくナチス親衛隊の構成員になったという記述から推察できる。一方、安藤忠雄は大阪の下町で育ち、木工所などで遊んだ経験や長屋で体験した光の陰影を美しいと感じたと語っており、建築家を目指したことをごく自然だったと述懐している。しかし、プロボクサーとしての挫折や「自称」建築家に受注は少なく、ル・コルビュゼなどのドローイングをトレースし悶々とした日々を送っていた。丹下健三らが語る建築言語を上からのものと批判し、1972年に論文『都市ゲリラ住宅』を発表した。当時劣悪だった都市環境に対し、閉じられた私的空間を豊かにすることで社会に抵抗を試みるという趣旨だった。それを具現化した『住吉の長屋』で建築学会賞を受賞したが、審査委員の村野藤吾が「一般解ではない」と付記を求めた逸話もある。また、ル・コルビュゼやモダニズムを意識したという意味で、フンデルトヴァッサーも同様である。すなわち、その評価の違いが、作風に正反対となって表象されたと考えられる。

こうした背景と作品紹介を通して建築史の観点から、双方とも西洋建築の文脈にあり、遡るとギリシア・ローマの様式に行き着く。大きな理由は、ル・コルビュゼが自身の作品の真正性を語るためギリシア・ローマの様式になぞらえた点、そして、コルビュゼを両者が参照したからである。次に、科学技術史の考察では、現代イタリアの建築計画は「レスタウロ」（修復と計画）の手法により、既存建築物の素材の組成を科学的に同定することが真の修復であり、未来へ向けて価値を付加することになるとされ、日本の建築や都市計画も参考にすべきであろう。また、産業革命以降の建築技術の発展は、鉄道や工場など大量生産を前提とするインフラ整備技術に源流を持つ。更に、技術者倫理の視点では、ウィトルウィウスが提起しアルベルティが再解釈した『建築書』の中で、建築家は中庸や節制に気を配ること、装飾とは「不増不減」の絶妙さにあるとし、自然から探求する姿勢を持つべきだとした。

ここでいう自然探求とは、自然を制御し人間が暮らしやすくする行動に他ならない。なぜなら、自然の脅威などから身を守る装置が建築物であり、その内部で「くつろげる」ことが建築物一家の本質である。しかしながら、フンデルトヴァッサーが戦時中に体験した家は、ヘーベルが示した「いつか死に直面する人間が現世に一時逗留する場」ではなく、常に死に直面する家であり、ボルノウが定義した人間の座標零位を持ってない、すなわち、「落ち着けない」家に暮らさざるを得なかった。また、安藤忠雄が用いた「裸性」とは、人間存在が家の外では見せない生々しい本性を内で表すと述べており、ドイツ語で家を意味する”Heim”から派生した”geheim”が、「(家)という機能を備えたもの」＝[ge]＋「家」[heim]＝「秘密の」を意味することに重なり、ボルノウが言う内外の結節点としての出入口・玄関によって、存在の社会性の度合いが変わる点に相通じる普遍性がある。

最後に、双方の建築作品を比較した。顕著な類似点は、両者ともに建築学では男根を表すとされるスカイスクレーパーが皆無なことである。また、設計施工で「無茶振り」をし、それが技術者魂をかき立てさせる点も類似している。大きな相違点は、自身の建築言語を半ば強要する安藤忠雄に対し、自作に落書きをされ、建物にカビが生えるのは建築物が健全な証拠だとするフンデルトヴァッサーは対照的である。まとめとして、いずれの作品も通常の建築物より維持管理にコストがかかり、文化的資産と捉えなければ保全・継承が、とりわけ日本では難しいのが現状である。芸術的建築作品を保全・育成するには、観光立国を標榜するオーストリアに学ぶべきものがあると筆者は考えている。

生き抜く力を育成する伝統・文化教育の推進に関する考察

－カンボジアと東京都の取り組みを視座にして－

大矢 隆二（常葉大学）・安藤 雅之（常葉大学）

現在、世界的にグローバル化が進展する中で、国際社会に生きる日本人としての自覚をもち、主体的・創造的に未来を拓くとともにグローバル対応力を備えた日本人の育成が求められている。平成18年に改正された「教育基本法」の前文において、新たに「公共の精神」の尊重、「豊かな人間性と創造性」や「伝統の継承」と「未来を切り拓く」教育の基本の確立が求められた。同年、東京都教育委員会では、高等学校に学校設定教科・科目として「日本の伝統・文化」を設定し、「郷土や自国の伝統・文化・歴史に対する理解を深める」、「伝統・文化を継承・発展させる主体的、創造的な実践力を培う」ことを目的として取り入れている。これは、系統的・体系的なカリキュラムとして構成されており、先導的な取り組みとして一定の評価を得ている。しかし、アイデンティティの育成という面から考察するとき、地域の固有性・特殊性を通しての地域愛、また、その地域で生きる生きがい等の心情的側面をどのように育成していくかが課題となる。

日本の「伝統・文化」に関する指導については、これまでも各学校において、各教科、特別活動および総合的な学習の時間に位置づけて実施されている。しかし「伝統・文化」教育の意義やその目的は必ずしも明確に位置づけられているのではなく、「体験的に学ぶ」といういわゆる名の下で、行事的、慣例的取り組みとして展開されることが多かった。この点において、東京都が策定した「日本の伝統・文化」カリキュラムは、教科・科目との関連も図りながら系統的かつ体系的なカリキュラムとして構成されており、アイデンティティ形成を図り、ひいてはグローバル対応力を育成するカリキュラムとして評価できる。

小学校教育にアイデンティティの育成を取り入れているのがカンボジアの古典舞踊教育である。カンボジアでは、古典舞踊を教材として「伝統・文化」の教育が行われており、各学年の系統性をもった学習内容等、学ぶべきことが多い。学校教育への古典舞踊の導入は、国家再建の途上にあるカンボジアにおいては課題解決の一つの方法である。自国の「伝統・文化」を理解させ、カンボジア人としての自覚と誇りをもって伝承させていくために、歴史を学び、一つひとつの動作や型の意味を学ばせ、自文化を意識の中に取り込み、国家・社会の形成者育成がその大きな目的である。国家・社会の形成者としてのアイデンティティを国民に育成することは、まさに学校教育に託された重要な使命であり、古典舞踊の教育は、一つの手段としてその役割が期待されている。

今日、わが国で求められている教育の充実は、子どもたちが郷土や自国の伝統・文化・歴史に対する理解を深めるとともに、伝統・文化を継承・発展させる主体的、創造的な実践力を培う体験、学習機会である。この点において、カンボジアの小学校における古典舞踊教育の取り組みは大変参考となる。

心的辞書と言語処理方略の発達過程—日英語バイリンガル児の事例から

杉本 貴代 (常葉大学)

語彙の爆発的増加期にあり、音声言語を主たる知識獲得(コミュニケーション)の手段とする幼児は、どのように心的辞書(メンタル・レキシコン)を構築していくのだろうか。日本語の心的辞書は和語、漢語、外来語、オノマトペの4種類の語彙(語種)または語彙層で成り立つとされる(Ito & Mester 1995, 2001, 窪園 1999)。本研究では、和語に固有の連濁の現象をとりあげる。連濁は、複合語の後部要素の語頭子音が濁音化する現象であり(例:いちばん+はし→いちばんぼし, /h/→[b])、日本語の心的辞書の特徴づける語種の一つである和語(やまとことば)に固有の現象として知られている。これまでの成人対象の研究から、連濁が生起されるためには、①和語であるか否かの知識と、②単語を解析して有声阻害子音の有無を判別する能力の2条件が求められると考えられてきた。しかしながら、連濁獲得に関する近年の先行研究から、子どもは初めから成人の2条件をそのまま学んでいるわけではなく、幼児が自ら利用可能な言語情報を用いて連濁処理方略を発達変化させ、就学期を境に質的变化を経て成人に近づいていくことが示されている(preschooler-specific Rendaku strategy, Sugimoto 2013, 杉本 2014)。本研究では、日英語同時バイリンガル児の連濁処理方略の発達過程について短期縦断研究を行った。その結果を同年齢の日本語モノリンガル児の傾向と比較考察したところ、次の2つが分かった。第一に、モノリンガル児と同様に、バイリンガル児も単語本来のもつ韻律情報をもとにした幼児期固有の連濁方略を確立していく過程が確認された。第二に、日本語モノリンガルに比して、日英語同時バイリンガルは連濁をより一般性を帯びた規則として短期間に一気に獲得していることが示された。本研究は一事例の幼児期に注目した短期縦断研究であるため、今後は同事例の学齢期以降の発達変化や、日本語と他の言語の同時バイリンガルの獲得過程も検討する必要があると思われる。

『ボヴァリー夫人』における母親としてのエンマ

水町 いおり (名古屋市立大学研究員/愛知産業大学非常勤講師)

本発表では、母親としてのエンマをジェンダー的視点で分析し、『ボヴァリー夫人』の新たな読み方を提案することを目的とした。まず、第1章で、七月王政期の社会規範と、女子教育が補完する「良妻賢母」という母親像が成立するプロセスを歴史的に考察した。当時は、女の役割として、子どもを産み、育てることが望まれており、その規範から外れることは社会から逸脱することであり、疎外されることであった。結婚しても子どもが生まれなかった女の悲惨さは言外に尽くせない。「理想の母」でなければ、女は生きてはいけなかった時代であり、それが女の与えられた唯一の人生だったことについて述べた。

次に、第2章では、エンマにとっての子どもの役割を1.夢の担い手としての子ども、2.「理想の母親像」を作り出す道具立てとしての子ども、3.不完全な母親にとっての子ども、4.愛情の対象としての子どもの4つに大別して分析した。エンマにとって、子どもは希望と落胆という両義性を持ち、理想の妻(規範)と、女としての肉欲的魅力(脱規範)を引き出す道具立てでもある。また、不完全な母親として、子どもを虐待し母親の役割を放棄するエンマの姿は、満たされない現実に苦しむメタファーである一方で、なんとかして子どもを愛そうとする姿には、現実を受け入れて、規範に沿って生きようとする意志も見られる。

エンマの母親としての姿は複雑であり、一義的ではない意味づけがなされているが、エンマにとっての子どもの役割を分析すると、一人の女としてどのように生きるのかを模索し、苦悩し、葛藤し続けたエンマの心象世界を見ることが出来る。このように多様性を持ったエンマの姿は、類型化された「理想の母」ではない「個人化」を求めるフェミニズム運動につながる可能性を感じさせる。そこで、本発表では、エンマは「新しい女」の萌芽が見られる前衛的な女性であり、『ボヴァリー夫人』は、「母親」であることと「個人」であることの狭間で揺れ動きつつも、自らの生き方を模索した一人の女の心象世界を描いた作品であるという『ボヴァリー夫人』の新たな読み方を提案した。

【第2部】 討論会(ラウンドテーブル)

コーディネーター：川口 雅也 (浜松学院大学)

パネリスト①：澤田 敬人 (静岡県立大学) 「競い合う学問：地域研究と比較文学」



同じ地域を対象にする研究が複数ある場合、研究者どうしフィールドでニアミスになることもあるし、競い合うこともある。地域研究と比較文学のニアミスを論じる中で比較文化の可能性を探りたい。

パネリスト②：津村 公博 (浜松学院大学) 「比較文化論的アプローチへの疑問」

ある文化を理解する時に、異なる文化を比較の基点として、二項対立による分類や用語に頼るアプローチを用いられるが、文化の多様化や文化変容の中で、この比較文化論的アプローチに疑問を感じる時が多い。この疑問を追究したい。



パネリスト③：岡本 武昭 (前中部支部長) 「研究領域の拡大と比較文化」



例えば、経営学の研究領域でみてみると、成立当初は生産論が中心であったが、研究対象の企業を取り巻く社会・経済環境の進展・変化に伴い領域は販売、心理、文化へと領域が拡大してきた。他の学問領域でどうか、検討したい。

円卓討論会「比較文化学と学術的伝統」

川口 雅也 (浜松学院大学)

最初に3人の演者、経営学の岡本武昭氏、多文化共生の実践者であり映画監督でもある津村公博氏、オーストラリアをはじめとする地域研究を専門とする澤田敬人氏により、それぞれの研究分野の視点から、時代と共に様々な文化との関わりを重視するように変遷してきた経営学の在り様、それぞれの文化が他の文化との比較によって固定概念化されてしまうことへの懸念、研究領域の細分化により、研究対象が分断され研究に支障をきたしてしまうという問題点の指摘が各10分程の持ち時間の中で簡潔になされた。

その後、主題ごとに3つの円卓に分かれ、それぞれの卓に6人ほどの聴衆が加わり、演者と共に、それぞれの主題で議論を展開した。

最後に再び、演者が議論の結果を報告し、コーディネーターがそれをまとめることになっていたのだが、思いのほか議論が広がりを見せ、また深まっていったため、そこから出てきた見解を簡潔な言葉で容易に締めくくってしまうことは、言葉によって、その広がり・深まりを限定、あるいは歪めてしまうことになるとの思いから、敢えて議論を完結することは避け、今後の学会で継続して考察していくこととした。

学会に参加していた者全員が参加する討論の形は、研究分野を越えるだけでなく、演者と聴衆という枠をも越える討論を実践したものであり、日本比較文化学会の在り様にふさわしい討論会ができたという自負している。



第6回中部支部大会 スナップ



2014（平成26）年度 第7回中部支部大会のご案内

以下の日程で、中部支部大会を開催いたします。

日 時：2015（平成27）年2月15日（日）13:00～16:45

場 所：常葉大学サテライトキャンパス 61 教室

発表を希望される方は、日本比較文化学会のホームページに掲載の「研究発表申込書」に必要事項を漏れなく記入し、平成27年2月6日（金）までに、下記宛にEメール（ファイル添付）でお送りください。（※申込期日を延期しました）

「研究発表申込書」の送付先：j_shiratori@seisa.ac.jp

「中部支部」会員募集

中部支部大会 『名古屋地区』 開催者募集

「中部支部」会員を募集しております。当面、中部支部は他支部との合同による全国大会の開催を目指しています。中部支部が、全国大会開催や紀要編集をも担える支部にしていくために、みなさまのご協力をお願い申し上げます。

また、今後『名古屋地区』におきまして、中部支部大会を開催することを予定しております。つきましては、名古屋地区での支部大会開催推進の意思がある方を募集致します。

中部支部をより充実・発展させていくために、是非ご協力いただきたく、お願い申し上げます。

開催を希望される方は、下記までご連絡下さい。お待ちしております。

○連絡先（澤田 敬人）：sawada@u-shizuoka-ken.ac.jp

○ 同（川口 雅也）：kawaguchi@hgu.ac.jp

『中部支部ニュース』第6号
発行：日本比較文化学会中部支部